



プロジェクト未来遺産登録証伝達式を終えて

未来遺産・見沼たんぼプロジェクト推進委員会代表

見沼たんぼくらぶ会長

新井 一裕

本年2月1日、未来遺産・見沼たんぼプロジェクト推進委員会に対し、日本ユネスコ協会から「プロジェクト未来遺産2014」の登録証伝達式が行われました。当日は、清水さいたま市長をはじめ、埼玉県、さいたま市、川口市の行政担当者、支援団体ほか多くの関係者にお集まりいただき、日本ユネスコ協会連盟選考委員の柳沢氏から私が登録証及び目録を受領いたしました。

このプロジェクトは、当くらぶを含む20の市民団体、教育機関、農家等で2011年に結成された推進委員会が行ってきたもので、「首都圏に残された大規模緑地である見沼たんぼを、100年後の子供たちに伝えていく」ために、それぞれの加盟団体の活動を関連付け、また、委員会独自の事業も展開していき、より効果のある見沼地域の保全、創造に努めていこうとするものです。

協会の柳沢氏は、「このプロジェクトは、自然、歴史、伝統文化を融合させた地域づくりであり、次世代に伝えるための活動が優れている」と講評されました。伝達式終了後は、田畑貞壽千葉大学名誉教授の記念講演及び影絵劇団いろり座の「見沼の滝」の上演が行われて、一連の行事が終了しました。また、当日の記念品として、見沼ファーム21の島田さん、ファームインさぎ山の萩原さんのご協力による赤飯が配られ好評でした。

私たちは、今回の登録を機に、動の輪をさらに広げていきたいと考えます。見沼たんぼくらぶの会員の皆様におかれては、この登録の意義をご理解の上、一層のご尽力、ご支援をお願いいたします。

斜面林の体験学習 小学生27名を含む81名で落葉かきを楽しむ

12月14日（日）午前、見沼たんぼくらぶ主催恒例の斜面林体験学習は、大宮体育館南側に広がる約2^{ヘクタール}の「大和田緑地公園特別緑地保全地区」。さいたま市みどり愛護会大和田支部（当地の保全作業ボランティア）・NPO法人自然観察さいたまフレンド（当地の植生調査及び自然観察実施）・大和田自治会1丁目西区の全面的な協力をいただきました。小学生27名を含む総勢81名で落葉かきを楽しみました。子どもたちはみんな、熊手を持つのは初めてと言います。遊び感覚で一所懸命落葉をかき集めては落葉プールに潜り込んで大はしゃぎ。（小野 達二 記）



見沼たんぼ地域の会員関係情報

首都圏の大規模緑地「見沼たんぼ地域」を未来の子ども達に

未来遺産・見沼たんぼプロジェクト推進委員会 事務局長 北原典夫

1 首都近郊で奇跡的に残った「見沼たんぼ地域」

「見沼たんぼ」は、3千万人余が集住する東京巨大都市圏の20～30キロ圏にあるさいたま市のほぼ中央に広がる1260ヘクタールの「農的な大規模緑地空間」です。

見沼たんぼの1,260ヘクタールという面積は、東京の千代田区より100haほど広い面積で、空の広さと緑の斜面林、そして大地の広がりを感じられる田園風景が、さいたま市・川口市等の200万人余が居住する市街地のすぐそばに広がっています。



この大規模な緑地空間が膨張する首都圏の開発の波に飲み込まれることなく残ったことは、奇跡的とも言いうると思っています。

2 振り返る「見沼たんぼの保全」の歩み

(1) 治水政策による「開発抑制策」の開始

1960年代以降、首都圏の人口増加のなかで、見沼たんぼ内に住宅や工場の開発が入り始めましたが、その歯止めとして1965年に「治水政策上の開発抑制策」が行われました。1958年の狩野川台風による芝川下流部の川口市などで死者まで出した大きな浸水被害を受けて、その中流部である見沼たんぼでの遊水機能の重要性が見直され、川口市等の要望を受けて、1965年から埼玉県による芝川の「治水政策上の開発抑制策（見沼三原則による開発抑制）」が始まり、行政指導上の開発規制エリアとされました。

その後1970年に、都市計画法で全域が開発を抑制する市街化調整区域に指定され、1971年には、大半の農地が「農業振興地域」の「農用地区域」に指定されました。

(2) 「大規模緑地空間としての保全・活用政策」の提起と「意見対立」

1980年代後半には、「治水政策（見沼三原則）での規制」の限界と「新たな保全・活用策の必要性」が認識される中、「見沼たんぼを将来的にどうするのか」という政策課題が、埼玉県の内部で提起されました。

1984年、埼玉県は、県、関係3市（浦和・大宮・川口）及び学識経験者からなる「見沼田圃保全検討委員会」を設置し、2年間の検討結果として、「見沼たんぼを農的な土地利用を中心とした大規模緑地空間として保全・活用する」という政策提案書をまとめました。

しかしながら、規制緩和とゴルフ場開発が時代の流れとなっていた時期に、「見沼たんぼ全域を、農地利用を中心にしながら大規模緑地空間として保全・活用する」という政策提起は、地元農協幹部からの反発もあり、県幹部から否定されることとなり、「見沼たんぼの北半分は開発容認、南半分は、ゴルフ場開発を中心とした緑地として残す」という方向で検討し直すこととなりました。

その後、県の開発規制緩和の姿勢と見沼たんぼの保全を望む住民の「規制緩和=開発への反対運動」とのぶつかり合いの中で、県民やマスコミ界を巻き込んだ政策討論の時代が10年間ほど続きました。

(3) 大規模緑地空間としての「合意」の形成と「基本方針」の確立

1995年、埼玉県と浦和・大宮・川口の3市及び関係農協の代表や環境保護団体の代表などが参加する「見沼田圃土地利用協議会」で、4年5か月におよぶ協議の結果、「見沼田圃の保全・活用・創造の基本方針」と「さいたま環境創造基金による土地の公有化施策」が合意され、「見沼たんぼ全域を農地・公園・緑地等として保全・活用・創造していく」という政策方針が確立されました。

3 「基本方針」のもとに内容を豊富化してきた見沼たんぼの市民運動

1995年からの「基本方針」に基づき、見沼たんぼの土地利用は、「全域で農地・公園・緑地とする」という大規模緑地化政策が展開されるとともに、公有地化基金による農地の公有地化策が開始されました。

① 育ちつつある多彩な農的な実践活動

公有地化された農地の市民団体による活用の開始以来10年余の時の流れの中で、市民団体による様々な農的な実践活動が育ち、広がりつつあります。

② 自然環境の保護・学習活動

見沼たんぼ地域の河川・用水路等の水辺及び周辺斜面林には、2010年のさいたま市の調査でも71種もの絶滅危惧種等の重要種が生息するなど、貴重で多様な生物環境を残した田園緑地空間です。これらの貴重な自然環境を保護する自然保護活動や、自然環境を学ぶ自然観察・学習活動団体なども多数、多彩な活動を展開しています。



③ 歴史・文化資源の研究活動、継承・普及活動

この地域は、歴史資産としても貴重な資源を有しています。弥生時代以来の「御沼（みぬま）」への湖水・龍神信仰を基礎とする地域の伝統文化や伝承・昔話などが多数存在します。それらの歴史・文化資産の継承、普及活動などに多彩な市民活動が広がりつつあります。

4 見沼たんぼ地域の未来に向けた多くの課題

この地域を未来に向けて、さらに魅力のある地域としていくには、まだまだ、多くの課題があります。

①基本的な開発圧力に対して市民団体の拮抗力の醸成も必要です。②「農的」大規模緑地空間としての農業振興対策も重要性です。③地域固有の自然環境の保全・再生の課題もあります。④水田景観など田園景観などの保全にも力を入れていく必要があります。⑤また、地域としての田園観光振興などの活性化対策も重要な課題です。

5 「未来遺産」としての目標感のある保全・活用・創造活動を進める

見沼たんぼ地域の多くの課題に取り組み、より素晴らしい見沼地域にしていくには、「市民団体・農家・教育機関・行政などの連携した息の長い努力が必要」です。

このような課題状況の中で、日本ユネスコ協会連盟が、未来に伝えたい地域の文化・自然遺産を守る市民の活動を「未来遺産プロジェクト」として認定し、それを推進する地域を、日本全体で応援する仕組みをつくることを目的に公募を開始したことを知りました。

この「未来遺産運動」の意義を高く評価し、「見沼たんぼ地域を、未来の子ども達に素晴らしい地域として伝え遺したい」という思いを共有する20の市民団体・農家・教育機関が集い、「未来遺産・見沼たんぼプロジェクト推進委員会」を、2011年4月に結成しました。以来、準備委員会時代を含めると5年にわたって認定・登録を得るための活動をしてきました。この結果、2014年12月に「未来遺産プロジェクト」として認定されました。

今後は、「未来遺産としての目標感」のもとに、個々の市民団体・農家・教育機関の活動の充実を基本にしながら、「未来に向けての見沼たんぼ地域の魅力の向上のための基本ビジョンづくり」や「協働・連携活動」を充実していければと願っています。

見沼たんぼ水彩スケッチ紀行

北宿大橋から新都心を望む

芝川に架かる北宿大橋から、上新宿橋の先「さいたま新都心」を遠望。画板が吹飛ばされそうになった春一番の強い風の一日であったが、強風の為か武甲山を囲む秩父連山がくっきりと見えた。

芝川の岸边には菜の花がさきはじめ、付近の桜の蕾も大きくふくらんできた。ここから約200m、北宿通りと見沼代用水西縁の交差したところに、市により最近「みむろ桜広場」が設けられ、散策の人々の憩いの場所として利用されている。

絵と解説 八木一郎



見沼見聞館 大宮南部浄化センター・自然庭園

見沼たんぼに流れる芝川に隣接した所にあり、2003年に完成。見沼地域の自然環境を復元し、自然環境学習のビオトープ（野生の生物が生きることが出来る空間という意味・Biotope）を目的として浄化センターに併設してつくられた。庭園には雑木林やせせらぎのある池などが配置され、多くの樹木や植物が名札を付けられており、自然観察の環境が整っている。見聞館では、見沼の歴史がよくわかる展示がされているのも有難い。

大円寺

今から約500年前 1525年（大永5年）陽光院殿大姉を開基として創建された曹洞宗の寺院で、東武野田線七里駅から七分のところ。

陽光院は岩槻城主 太田持資の血孫 資高の奥室で、主君供養の為建てられたと伝えられる。江戸時代から続く「新秩父三四か所観音めぐり」三四番目の結願時ともなっている。

（「みぬま通信 59号」掲載「見沼歴史倶楽部」会長石渡政男さんのお話より引用）



見沼たんぼくらぶ会員作品展

氷川女体神社への階段 作者 安形千恵子

見沼たんぼ周辺には三つの古い神社があります。関東一円に260社ほどある氷川神社の総本社である大宮・高鼻の氷川神社、見沼信仰を伝える氷川女体神社、両者の中間にある中山神社、この三社は見沼を神池と見立て、冬至の日の出の方向と浅間山を結ぶ直線上にいらんでおり、三社で一つの神社を形成していたとも伝えられています。何百年もの昔から多くの人々がこの急な階段を上り下りしたであろうことを偲びながら筆を執りました。



見沼たんぼ探訪記

見沼スケッチ会第8回水彩画展

見沼スケッチ会・第8回水彩画展が2月24日から3月1日まで、さいたま市氷川の杜文化館で開催された。文化館の門を潜ると、鬱蒼とした竹林の中を緩くカーブした小さな道がある。その道に案内されるままに竹林の中を進むと四阿などあって、自分が静かな空間の中を歩いていることに気が付く。

会場に入ると80点余りの作品が展示されており、川の流れや森の眺め、神社仏閣や公園の様子・・・等々、淡いタッチで描かれた作品に囲まれる。春の景色あり秋の景色ありで、四季を通じた見沼たんぼの様子が色々と描かれており春夏秋冬が一遍に来たような錯覚に陥ってしまう。

見沼たんぼに漂う自然に触れ、ウォーキングを楽しむに来る人が最近多い。その人たちが目に触れる風景がこの会場に集められているようだ。林があり、畑があり、畦道があり・・・と、見沼たんぼの自然が生き生きと描かれている。

一方、氷川女體神社や東沼神社などの作品も多い。歴史的にも貴重な建物なので描くのも難しいと思われるが、いずれも絵の前に立って静かに眺めると、厳かな雰囲気絵の中からつたわって来、



素晴らしい。流石に8回もの水彩画展を開催している皆さんの作品だ。

広い会場には、次々と見学する人が入ってくるが、中にはメモを取りながら鑑賞している人もいる。グループで来られた方も幾組かおり、一つ一つの作品を皆で話し合いながら評している。展示されている作品から学び得ようとしている点が多いという証であり、あまりの素晴らしい水彩画展である事に感心してしまった。(召田 紀雄記)

雑木林体験 シイタケの種ごま打ち

さいたま市みどり愛護会主催の大和田緑地公園特別緑地保全地区で表題行事は2月28日(土)実施された。9時30分からの本行事には一般公募者・当愛護会会員及び事務局(さいたま市みどり推進課)を併せて70名の参加者により、落ち葉掻き、コナラ・クヌギの幼樹の移植、シイタケの種ごま打ちの3作業である。「はじめの集い」での挨拶、作業内容・手順の説明の後、落ち葉掻き班は熊手や運搬用バックを準備して作業を開始し、北部雑木林中心に10時30分までに終わることができた。これは作業人数が多いこと、初めて参加の小学生たちの熱心な作業によることが大きい。一方、コナラ・クヌギの幼樹の移植班は多目的広場の移植地で昨年10月開催のさいたま市みどりの祭典において集められた「ドングリの里



親」からの上記の幼樹を本愛護会の管理する雑木林で必要とする植樹のための仮植作業であり、生長の良いもの50本の植付けを行った。作業終了後は落ち葉掻きの応援参加である。上記作業終了後に、シイタケの種ごま打ちとなるが、その間、種ごま打ちの事前準備班は長さ約30cmに切り揃えられた「ほだ木」にシイタケの種ごまを埋め込むための穴を電動ドリルにより開ける作業をする。これは電動ドリル作業の危険性・種ごまを打込み穴数の標準化などから熟練を要するためである。希望者のため穴あけ作業を残していた。

休憩の後、事前に配布してある説明書を基に種ごま打ち作業手順及び家庭での管理方法などの説明の後作業が始まる。作業は順調に進み準備されたコナラなどの原木150本に種ごまが打ちこまれ、希望の参加者には「ほだ木」2本ずつ持ち帰って頂くことになった。冬の日溜りの中、雑木林体験は無事終了できた。(若野 忠男記)

見沼たんぼの仲間たちNo.33

「見沼スケッチ会」について

主宰 八木一郎記

1. 会の概要と発足の動機

*「見沼スケッチ会」は「旧坂東家住宅見沼くらしっく館」を拠点に、毎月第一火曜日、見沼を愛する人たちが、見沼の風景を主なモチーフにして、水彩画の勉強をしている同好者40人程の会です。初心者も経験を積んだ人も一緒に勉強できる会を心がけています。

*私が見沼の風景を主題とするようになったのは、師であり旧制中学同級の畏友でもある喜多迅鷹画伯（「彩の国を描く会」主宰）から、「自分の愛着を持つ対象を生涯のテーマに持つことが大切」との示唆を受けたことでした。

*会発足の動機は2006年、館で拙作の作品を展示させて頂いた際、来会者から「一緒に見沼を描く機会があれば」という声を受けたことでした。

2. 見沼の魅力・主なスケッチの対象

*昔ながらの雑木林や畑・水田、見沼代用水によってつくられる田園風景など自然が今も多く残る見沼緑地。見沼の美しい風景と歴史は故郷への郷愁を誘い、絵の対象として尽きない魅力があります。

*スケッチの具体的対象は、旧坂東家をはじめ加田屋新田、見沼自然公園や大崎公園、浦和くらしの博物館民家園、土呂の市民の森などが主ですが、氷川神社・氷川女体社など神社仏閣も多く訪れております。

また井沢弥惣兵衛為永翁が開削した見沼代用水東縁・西縁付近の自然環境・斜面林などの景観も貴重な対象です。

3. 具体的活動内容

*晴雨に関わらず野外活動が前提の為、場所選びには苦心してきましたが、今日まで会員のご協力で無事続けて参り、今年6月で100回目を迎えます。

集合時間は10時で、14時までに作品を仕上げ、引き続き合評会に入ります。



*合評会では講師の立場から次の項目に留意して、良い点・修正すべき所など意見を述べますが、あくまでも会員同士の意見交換を重視するよう心がけています。

- ① 何を描きたいのか明確にする
- ② 自分が感動したものを主題に選ぶ
- ③ 遠近法など基本技術は身につける



*「見沼スケッチ会水彩画展」を年1回大宮の市立図書館あるいは氷川の杜文化館で開催し、皆様にご来場いただき、ご意見をうかがって次の勉強の励みになるようにしております。

*水彩画を始めてみたいという初心者の方も、ベテランの方もお気軽にご参加ください。

{参考}

*会費 年4000円

*主宰者略歴

「見沼塾見沼田圃をスケッチしよう」講師
2000年 年賀はがき「21世紀の彩の国
“早春のさいたま新都心”」の原画採用
2006年 文化ともしび賞（知事賞）受賞

見沼たんぼを支える農家さん

トマトの浅子和宏さん

すぐに売り切れてしまう、という直売所で人気のトマトの話聞いていて、ずっと気になっていました。今回お話を伺ったのは、まさにそのトマトを作っている浅子和宏さん。大宮「思い出の里」霊園の西側、染谷の「やどかり情報館」近くのお宅におじゃましたのは2月半ばの風の強い午後、その日の出荷を終えた浅子さんが笑顔で迎えてくれました。

浅子さんはトマトを主として里芋やホウレンソウ、トウモロコシなど季節ごとの野菜や米を有機農法で作っています。ボカシやEM菌の他に、刈った雑草を発酵させて作る雑草液、籾殻を発酵させてそこに米糠や鶏糞、雑草液などを加えて攪拌して作っている肥料、土中の微生物を活性化さ



(浅子和宏さん)

せる働きを持つ農業用のセラミック等々。いろいろと研究・工夫されていて、その作り方や効能などを熱心に次々と説明して下さいました。納屋や庭のあちこちに、こうした独自の工夫を凝らした装置と有機肥料などが置いてあります。

ずっとやってきたことを変えるのは、とても難しい。だから農業を長くやっている人ほど農法を変えられない、と語る浅子さん。有機を始めたそもそもの始まりは市民生協などからの希望があったからだそうです。生き抜くためには有機だと思った、という短い言葉に込められた重さを感じました。浅子さんの家は、元々何代も続いた農家でしたが、和宏さんが2歳の時にお父さんが戦

死。それからはお母さんと二人で大変な時代を乗り切ってきました。現在は浅子さんご夫婦と息子さんの3人で農業を営んでいます。

片柳コミュニティセンターで週末毎に開かれる直売はなかなかの人気ですが、ここ染谷農産物直売所の会長が浅子さんです。その他にも県の産直協同農事組合の副組合長などいろいろな役を務めてきました。また、「見沼産直グループ」という新規就農者をも含めた生産者の集まりや生協のグループの一つ「野の文化教室」との田んぼの体験活動、障害者の仕事の間を作るという目的で始まった「やどかりの里」の皆さんへの畑の指導等々、農業経営だけでなく新規に農業を始めた人や市民をも含めた幅広い地域の活動にも長年係わってこられました。

これからの見沼を考えると、志を同じくする人たちと協同して農業をやっていたら、そしてそこに市民からの応援も受けて一緒にやっていたら、と語っている浅子さん。写真ではちょっと



(ハウスの中のトマト)

強面にみえるかもしれませんが、「損得だけではできないよ。」という一言と、終始にこにこと楽しそうに話される姿が、まだ春浅い日差しの中でほんのりと心に残りました。

(取材：島田・高橋、 記：高橋)

浅子さんの野菜が買える直売所：四季彩、染谷農産物直売所（片柳コミュニティセンター内）、市民の森農産物直売所、思い出の里霊園の直売所

見沼たんぼくらのイベント案内

平成27年度見沼たんぼくらぶ総会

日時：4月25日（土）10時（9時半受付）
会場：さいたま市立大宮図書館視聴覚ホール

第102回見沼塾《未来遺産登録記念講演》

日時：4月25日（土）13時半（13時受付）
会場：さいたま市立大宮図書館視聴覚ホール
見沼たんぼの歴史と保全の歩み・今後の課題
講師：北原 典夫氏 申込み：当日、会場

見沼ふれあい農園づくり一会員・福祉施設

京芋・里芋・八つ頭・生姜栽培（収穫11月）
① 5/1（金）② 5/29（金）③ 6/10（水）
④ 6/24（水）⑤ 7/14（火）⑥ 8/4（火）
8時30分集合（8時受付）＊雨天順延
農園：3号地（緑区大字見沼484）宮本2丁目バス停から徒歩10分
申込み：会員限定、4月25日まで事務局へ

第61回自然観察ハイキング

クマガイソウ・イカリソウ自生地と春の花
日時：5月4日（月・祝）9時30分
集合地：さいたま市立片柳小学校校庭
申込み：当日、集合地で9時から受付
交通：大宮駅東口からバス⑦片柳小学校下車

第103回見沼塾《未来遺産登録記念講座》

日時：5月30日（土）14時（13時半受付）
会場：さいたま市立大宮図書館視聴覚ホール
見沼たんぼの文化遺産・史蹟
講師：河田 捷一氏（大宮郷土史研究会会長）

第62回自然観察ハイキング

見沼自然公園とノアザミ自生地
日時：5月31日（日）9時半
集合地：見沼自然公園管理棟前
申込み：当日、集合地で9時から受付
交通：大宮駅東口からバス⑦締切橋下車北側

見沼たんぼくらぶ入会を勧めます！

見沼たんぼをもっと知りたい

見沼たんぼの自然にふれてみたい

見沼たんぼで何かしたい

見沼たんぼの保全に協力したい

そんな皆さまをお待ちしています！

■ 季刊『みぬま通信』をお届けします。

4月・7月・10月・1月発行

■ 埼玉県土地水政策課の支援のもとに、見沼たんぼ地域の里やまで、様々の体験事業を展開しています。子どもから年寄まで気軽に楽しめるイベントです。

○…見沼ふれあい農園づくり

農地はスタッフが耕運し、畝づくりを済ませ、種蒔き・植付から除草、収穫までの作業です。

「京芋・里芋・八つ頭栽培」や「秋野菜栽培」などを楽しみ、福祉施設にも寄贈しています。

○…自然観察ハイキング

自然観察指導員のガイドで、年4回、史跡を巡りながら花や鳥など見て回ります。

○…見沼たんぼ清掃ボランティア

○…斜面林の体験学習

○…見沼塾一見沼の自然や文化を学ぶ講座

■ 年会費 個人（同居の家族単位）・団体・企業とも1口¥1,000（団体・企業は3口以上）

みぬま通信第62号

発行日 平成27年月4月1日

発行所 見沼たんぼくらぶ

〒337-0053 さいたま市見沼区大和田町
1-2124-3 小野方

TEL・FAX (048) 683-1764

E-mail t.ono@axel.ocn.ne.jp

URL <http://minumatanbo.web.fc2.com/>

© 2015 Minuma Tuusin